

た。また、明治四十二年、この制度は全廃され、看病人は陸軍看護体制から消滅することとなった。

(埼玉県所沢市)

創立時の「済生学舎」の人脈

唐 沢 信 安

長谷川泰（長岡市出身）の経営する「済生学舎」が、明治九年から三十六年八月末日の廃校迄に日本の開業医、特に西洋医学を学んだ医師の半数以上を養成した事は、医学史上重要な意義を有する。

その中に野口英世や吉岡弥生・光田健輔が居た事を忘れてはならない。

済生学舎創立時の記録は今日極めて少なく不明な点が多い。そこで筆者は東京都公文書館に残る資料、其の他の文献に基いて創立前後の様子を述べてみたい。

長谷川泰は東京医学校校長心得（副校長）の地位にあって、初代校長相良知安のよき協力者であったため、ドイツ医学導入問題、藩閥政治の波にからみ、明治七年八月二

十七日に長崎医学校校長に左遷されている。

ところがこの長崎医学校は二ヶ月後の十月十二日には東京医学校（現東京大学）に吸収合併されて台湾征伐の爲の藩地事務局附属病院となり一時廃校となっている。学生達と実験器具等備品は東京医学校に吸収されている。泰はこれ等の世話と事務手続に忙殺された。（その学生の中に済生学舎の後継者の山根正次がいた。）

泰は一切の事務引継ぎを終えると東京に再び帰り、本郷元町一丁目十番地（順天堂医院より五百米後楽園寄り）に居を構えた。

一方泰の恩師の佐藤尚中はドイツ人教師と意見が合わず東校大博士兼大丞の地位を退官し、明治六年十一月に「済衆舎」なる医学校を造った。場所は浅草鳥越町甲の二松平忠敬の邸内とし、修業年限は二年半で、二十歳以上の男子に限り入学させた。学生は五年九月の東校の人員整理の学生が多かった。

ところが尚中は湯島に順天堂医院を設立して十日後の明治八年四月十三日結核の悪化のため、大量の咯血と高熱で急に倒れる事態に陥った。急遽駆け付けたのは佐々木東

洋、佐倉の岡本道庵、そして近くに住む長谷川泰等の門人達であった。余りの重態でウィーン大学留学中の養子佐藤進を電報で呼び戻す程の事態を生じた。

病気で衰弱し切った尚中は、「済衆舎」の学生の救済と、念願である「西洋医養成の急務」を長谷川泰に託したのである。そこで長谷川泰は医学校を造るべく決心を固めた。

学校の名前は尚中の「済衆精舎」と長岡藩医学校の「済生館」の両者より取って「済生学舎」と呼ぶことにした。又特別な病院実習の場は設けず、とりあえず近くの尚中の順天堂医院を利用する事にした。

他方、時の文部省は明治七年、医療及医学教育関係の規則である「医制」を發布し、八年には医術開業試験の実施を東京・大阪・京都の三府で行い、九年一月十二日より全国各府県で医術開業試験が受けられるよう通達した。

その通達には、従来の開業医は届書で免許が与えられるが、篤志の者（志願者）は年令に拘らず進んで医術開業試験を受けるように文部省は呼びかけた。

そのために泰の私塾済生学舎には年令・学歴の異なった種々様々の医学生が集った。又泰は郵便報知新聞に開学の

広告を掲載した。

校舎は、泰の自宅の路一つ隔てた本郷元町一丁目六十六番地の民家を学校とした。

修業年限は三ヶ年とし、夏学期（四月より九月迄）と冬学期（十月より三月迄）の二学期制とした。教師は佐倉順天堂以来の友人と泰の恩顧を受けた東京医学校の卒業生が協力した。明治八年十二月二十四日の、泰が東京府知事楠本正隆に提出した「済生学舎開業願」によると、長谷川泰・山田亮長・森謙三の名前が記してある。

教師の主軸になったのは、長谷川泰と明治九年卒業の副舎長「山崎元脩」^{げんしゅう}（新潟県西蒲原郡島上村横田出身、泰の父宗斎の弟子）と元脩と同級生で泰の弟の「長谷川順次郎」の三人であった。

泰は非常に語学力に優れた人で、華氏（ハルツホルン）病理摘要・斯泰涅爾（スタインエル）小児科・肺癆論を訳述して講義をした。またニーマイエルの内科書を原書で講述し、後に内科要略と題して出版している。

山崎元脩は東京医学校のミュレル・ホフマン両外人教師の講述した解剖学を『医科全書解剖篇』二十七冊に著作

し学生に新鮮な講義をした。その後新潟医学校校長となる。

泰の弟・順次郎はドイツのフライの組織学を講じ学生の眼を輝かせ、後に栃木県医学校副校長に転任している。

第一期生の、後に済生学舎の講師となる「石川清忠」（大分県杵築市出身）と「山田良叔」（秋田県出身）の兩名は、明治八年の済生学舎開校一年前に入学し、全科原書で研修したと自己の履歴書に記録を残している。

以上の如く、日本医科大学の源流である「済生学舎」は多くの人脈により開校された。

（日本医科大学）